

ずいそう

## 建機カメラマンから見る除雪

池田 智



建設機械、工事現場専門カメラマンとして仕事をできるようになり6年。様々な現場、建設機械を撮らせていただいている。その中でも今回は除雪関係の話をしようと思う。

個人的な話で恐縮だが、筆者は北海道生まれの横浜育ち。両親は共に北海道出身だ。帰省するのは主に夏であったが、冬に帰省した際には雪道を歩くだけで苦勞し、札幌市内であっても吹雪けば雪と強風で呼吸もままならず難儀した記憶だけが強く残っている。

4年前から北海道を中心として、除雪の取材をさせてもらっており、北海道は開発局、札幌市、江別市、岩見沢市など、本州では新庄と青森空港だ。同じ政令指定都市でも札幌市と横浜市では当たり前だが異なることを痛感した。ところ変われば大違い。予算の使い方も想像以上に異なる。年間降雪量が月とスポンレベルに違うのだから引合いに出すのもどうかと思いつつ、関東育ちの筆者には驚きの連続だった。除雪にコストをかけるのは北海道に限ったことではなく、本州の降雪地域は同様に対応している。それでも規模、面積から北海道の特異性を感じずにはいられないのだ。

最初に札幌市の土木部でお話を聞いたときに、「除雪には高い除雪と、安い除雪があるの。わかる？」恥ずかしながら建設機械のことしか考えていなかったの、「そりゃ建設機械を使った除雪がコストがかかるに決まっている！！」答えはブー、外れ。建設機械を使用するのは安い除雪だという。では、高い除雪って何のこと?? 答えは雪を運んで捨てること。

雪が降る前に各行政所有の土地、地権者から借り受けた土地にシートを敷き、仮設の事務所を設置して準備。雪が降りだしたら、除雪した雪を運んで捨てる。ただ捨てるといっても住民が捨てに来てもいい場所、市の委託業者、県や国など地区や管理・管轄が異なれば夫々違うのだ。雪捨て場の仮設事務所はその管理も担う。市の除雪協力業者のトラックであればチケットを持っている。入場の際にそれを渡して雪を捨てる。雪が捨てられるとホイールローダーやバックホー、ブルドーザーで水をかけながら雪を固めて積み上げてゆく。その雪捨て場の予定量に達するまで固めて積み上げて、の繰り返しだ。予定量に達するとその雪捨て場はクローズする。

市の入札公告に雪の解体工事の案件が出始めると春も間近だ。関東に住んでいると、雪なんてあとは放っておけば勝手に溶けてなくなるのではないかと考えがちだが、管理工と言われる自然融雪分は全体量の2割ほど。冬に固めて積み上げた雪山の8割はホイールローダーやバックホー、ブルドーザーで崩して融かしてゆく。冬は固めて積み上げる、春は崩して融かす、ここにコストを掛けているのが雪国の実態だ。

建設機械好きとしては建設機械の話もしたい。夏に国内のメーカーを取材させていただいた際に、出荷前のホイールローダーがずらりと並んでいるところに遭遇した。担当の方によると、「これはすべて除雪用で11月くらいまでには全部なくなりますよ」とのことであった。街中や道路の除雪作業で主に使われるのは、



写真—1



写真—2



写真—3



写真—4

ホイールローダー、モーターグレーダー、ロータリー除雪機、散布車などだ。いずれもタイヤ式で一般道路の走行も可能な機械が活躍している。

北海道開発局のようにスノーステーションから除雪機を出動させるのとは異なり、札幌市などでは各区内ごとに冬季の公園や野球場の駐車場などが除雪用建設機械の置き場となっている。日常生活でモーターグレーダーなどの建設機械を頻繁に目にする機会があるというのはなんとも羨ましい話だが、地域の方からすれば単なる除雪機で珍しくもないらしい。

除雪センターに必ず1台あるのがバックホーだ。クローラー式の機械は雪捨て場内や除雪センター内で使用する。コンマ45以下程度の比較的小型のものだが、散布車に融雪剤（塩素）を積込むためにクレーンとして使用する。開発局のスノーステーションの場合は融雪剤の積込みエリアがあり、天井クレーンで吊上げて散布車に積み込んでいる。

北海道都市部の取材が多く、ネタも市街地除雪が中心になりがちだが、おなじ道内でも町から離れるとまた異なる。更に本州や山間では雪質や雪庇除雪など手段と目的が大きく変わる。今年もこれから降雪シーズンを迎える。大雪で孤立する地域が出ることはないように、これは本当にそう思う。

今までの取材で沢山の除雪関係の方にお会いした

が、共通しているのは雪に対して悪く言わないということだ。これだけ手間とコストをかけているから面倒に感じていないと言ったら嘘になるのかもしれない。それでも「雪は降るものだし、積もれば、誰かが除雪しないとみんな困るしょ」と真夜中、早朝から除雪作業を淡々とこなしている。更には「雪？別に嫌いでないよ。子供たちとスノボに行ったりするし」と笑顔さえ見せる。雪と共に暮らすというのはこういうことなのかと教えられた気分だった。

開発局では除雪の無人運転の実証実験も始まっている。除雪機のメーカーではオペレーター教育用にシミュレーターを用いるなどICTやリモートコントロールの分野での様々な取り組みが始まっているようだ。個人的に楽しみでもあり、取材する機会が得られたら、と思う次第である。

最後に。昔よく言われた3K（きつい、汚い、危険）はもう古い、令和のニュー3Kは「建機・効率・カッコいい」だと筆者は考えている。取材で行政やメーカー、建設会社の取り組みに触れるうちに思い浮かんだ新規格の3Kだ。ニュー3Kで業界のイメージを変換してゆき、担い手不足解消にいくばくかでも後押しができれば。それが筆者の願いである。

——いけだ さとし サトシドットリンク、  
建機・重機・工事現場カメラマン——